



西新井 消防団だより

特別号

発行 令和4年 No. 84W

編集・発行
西新井消防団 広報委員会
大師火災プロジェクトチーム

西新井大師の火災、知っていますか？

西新井の夜空が真っ赤に燃えた「その日」

昭和41年（1966年）5月25日 23時5分

消防団員たちは、どのように火災に立ち向かっていったのか、記憶を記録として残すため、大師火災プロジェクトを立ち上げて昭和の火災を追いました。



（丸山進様撮影）

一番先に駆け付けたのは、当時の消防団だった！

このプロジェクトは大師参道の商店街の方への取材からスタートしました。当時は現在のように夜間に全ての門を閉めることがなかったとのことで、放火だともいわれていますが、当時大師近くにあった**望楼（ぼうろう）**と呼ばれた火の見櫓（ひのみやぐら）から火災が発見されると東京消防庁で記録されています。

江戸時代中期に再建された由緒ある木造の本堂は、床下から出火し、あっという間に炎に包まれ、当時は高い建物がほとんど無かったことから、江北橋方面から帰宅途中だった当時の団員も、まるで爆撃されたかのように西新井方向の空が真っ赤だったと鮮明に記憶されていました。

そして大師の近くにお住いの方の証言で、**一番早く火災現場に駆け付けたのは当時の消防団員たちだったことがわかりました。**なぜ一番早く駆け付けることができたのか？その裏付けをとるために、当時の西新井大師周辺担当の分団（現、第4分団）の団員や、当日出動した消防団幹部のご家族からお話を伺い、当日の消防団員たちの足取りを考察しました。



望楼(イメージ)

消防団を襲う数々のアクシデント

昭和41年（1966年）5月25日の夜、大師参道で消防団員数人が食事をしていました。突然火の見櫓の鐘が激しく鳴り響き外に出ると、毎日当たり前のように目にしている境内のほうから火の手が！

団員たちはすぐさま大師そばの格納庫へ駆けつけ、手引きポンプ車を数人で押して敷地へ入ったが、気持ちが急ぐあまり大木の根や階段で『支柱』と呼ばれる手引きポンプ車を地面に固定するための前脚が曲がってしまう。

さらに手引きポンプやホース等の機材も現在よりもかなり旧式で性能がよくなかったため、長時間放水したことでエンジンに不具合が起きてしまった。

本堂内で炎が天井まで達するのに時間はかからず、屋根上まで火柱が突き抜けると屋根全体がドスンと落下し、落下したことで内部延焼の勢いが削がれ、仏像等も消失を免れたとも言われている。このとき参道は管轄外からも駆けつけた多数の消防車両で大渋滞だった。

山門に迫りくる火の手！

山門は江戸後期の建立で本堂と並び西新井大師の重要な建物であり、現在でも山門から本堂を拝む人がある象徴的な場所である。しかしこのとき山門には大きな危機が迫っていた、本堂の大きな木片が巨大な火の塊となり、風に乗って山門に飛んできていたのだ。

実は旧本堂は現在よりもかなり山門寄りに位置していた。もし山門が炎上し火の粉が参道の商店街に飛び火したら街全体に炎が燃え広がる大惨事になりかねない。

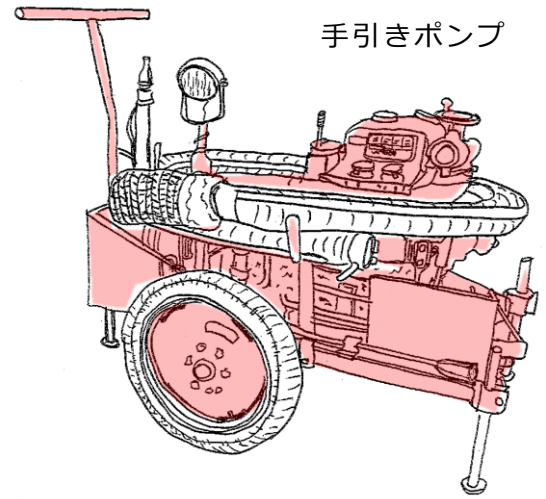
消防団と街の人が守ったものとは

このとき最初に大師に入った団以外にも駆けつけた団員たちが山門に集結、山門に近いお店や近所の方々も池から水を汲みバケツリレーをして共に必死の消火活動を行った。

そして…

日付が変わった26日午前0時12分、鎮火。
数々のアクシデントを乗り越えて、消防団と街の人々が協力して山門を火の手から守り抜いたのだ。これは是非とも現在そして未来へと語り継ぐべき街の防災記録ではないだろうか。

ちなみに東京消防庁の記録ではポンプ車17台を含む27隊が出場、負傷者は消防隊員1名を含む2名とされている。



消失前の旧本堂（丸山進様撮影）



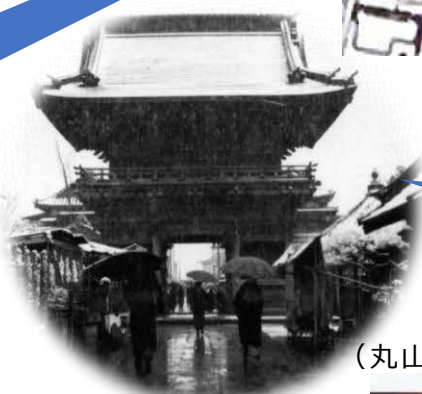
焼け落ちた本堂の屋根（丸山進様撮影）



(丸山進様撮影)



消失した
木造の
旧本堂



当時の山門

(丸山進様撮影)

今も当時と同じ位置にある
消防団格納庫

マジか！

と声が聞こえそうな風景



火元まで押し寄せる群衆 (丸山進様撮影)



延焼中の本堂正面 (丸山進様撮影)

屋根を修復した旧本堂



旧本堂の裏側で新本堂の建設が始まった (丸山進様撮影)



西新井大師新本堂完成、昭和46年 (足立区郷土博物館所蔵)

その時わたしは…



◆ 清水敏子様 ◆

旧本堂の良質で太い木材が燃えて破片が火の塊となり山門方向にバンバン飛んできていた。

旧本堂は今より山門に近かったので、周りの人達と山門に火の粉が燃え移らないよう必死に池の水からバケツでリレーをして消火をした。

その夜は、地元の会合に出ていて何人かで帰宅するところだった。

火事に気がついて見に行ったとき、敷地内に消防団が一番早く入って、ひょうたん型の池の水を使って消火活動をしているのを見た。

◆ 清水正雄様 ◆



◆ 篠原弘治様 ◆

当時の池は現在より大きく、ひょうたんの形をしていて、中央に橋が架かっていたんだよ。



◆ 石鍋実様 ◆

当日は出かけていて、帰宅する途中に江北橋方面から西新井方向の空がまるで爆撃を受けたかのように真っ赤に燃えているのを見て急いで帰宅、

着替えて参集したが駆けつけたときは本堂の屋根は焼け落ちた後だった。

◆ 関谷芳久様 ◆



消防団員だった父（西新井消防団第4代団長、関谷正春様）が当日山門の消火活動に出ていた。生前の父からよく『俺たちが山門を守ったんだ』と聞かされていた。



◆ 大長商店
大澤利様 ◆

火事に気がついて急いで二階にあがったとき、初めは中田屋さんが燃えているのかと思った。

当時は参道も平屋の建物ばかりで火事がとても近くに感じた、店の前は沢山の消防車で大渋滞していた。

自身は用事で西新井を離れていたため参集できなかったが、自分の分団からは4、5人が参集した。

彼らは当日参道近くで食事をしていたので格納庫へ駆けつけ手引きポンプを押して大師の奥の池から水を引いて消火活動をした。

急ぐあまり手引きポンプを地面に固定する「支柱」と呼ばれる脚が大木の根や階段などに当たって曲がってしまった。

◆ 中田春由様 ◆



西新井大師火災がきっかけとなり

本堂火災当時の西新井大師には、屋内消火栓やスプリンクラー、自動火災報知設備等が設置されておらず、この火災を契機として神社や寺院に対する消防設備の設置に関してその必要性が問われることになりました。

このたび貴重なお話をしてくださった皆様のおかげで私たちは東京消防庁の公式記録にない、この事実にとり着くことができました。

毎年1月26日に西新井大師で合同で行われる『文化財防火デー』の消防訓練も、この火災のことをひとりでも多くの方に知っていただき、今後も継続していくことが不可欠です。

西新井消防団と街の人々の貴重な防災記録として残すことで、日々の防災訓練や人間関係が、自分を、他人を、ひいては自分たちの街を守ることに繋がるという、ひとりひとりの防災意識向上のきっかけとなることを願います。

旧本堂の木材で作った記念品
(丸山江吉様所蔵)



- お話を伺った皆様(順不同、左より)：清水屋/清水敏子様、大師総代長/清水正雄様、元消防団員/石鍋実様、ミートショップセキヤ/関谷芳久様、大長商店/大澤利様、優美写真商会/丸山江吉様、丸山優子様、田口屋/田口行彦様、田口京子様
- 西新井消防団関係：中田春由様(第5代第4分団長)、藤田訥様(第12代団長)、篠原弘治様(第13代団長)、田口治雄団長(第14代)
- 参考文献・東京の消防百年の歩み/東京消防庁・東京消防庁五十年のあゆみ/東京消防庁・足立風土記稿/足立区郷土博物館
- 写真提供：優美写真商会/故丸山進様、丸山江吉様、丸山優子様



👉大師火災のインタビュー記事詳細や西新井大師付近や消防団の過去の画像を含む追加画像等は広報誌 WEB版にてご案内していますので是非ご覧ください。



過去の記事もご覧いただけます！
WEB版
西新井
消防団だより

西新井消防団

で 検索

